

観光の原点としての伊勢参宮についての経済的・統計的考察

明治大学 政治経済学部
教授 新田 功

1. はじめに

2013年に初めて訪日外国人が1000万人を上回ったとのニュースは記憶に新しい。それでは、1年間の入込観光客数が1000万人以上の観光地点（観光スポット、観光施設等）は日本国内にどれくらいあるのだろうか。白書、年鑑類を調べても、また、ネット検索を行っても、国内の主要観光地点の入込観光客数のランキングは見つからなかった。ネットで入手した断片的な情報に従えば、2013年については、東京ディズニーリゾートの入園者と浅草寺参拝客が約3000万人、大阪のユニバーサル・スタジオ・ジャパンの入園者と成田山新勝寺の参拝者がいずれも約1000万人であった¹。

このように年間1000万人以上の入込観光客がある国内の観光地点は少数であるが、この条件を満たす観光地点の1つに伊勢神宮を加えることができる。2013年に式年遷宮（20年に1度定期的に行われる遷宮）を迎えた伊勢神宮の内宮（皇大神宮）と外宮（豊受大神宮）の同年の参拝者数の合計は1400万人に達した。伊勢神宮（正式名称は「神宮」、狭義の神宮は内宮と外宮のみを指し、別宮、摂社、末社、所管社を含まない）への参拝（以下、伊勢参宮）者数のデータは、内宮、外宮のそれぞれについて、1896（明治29）年以降の時系列が入手できる。また、断続的にはあるが、明治以前の年間参宮者数についての言及も歴史的文書の中に残されている。それらによれば、年間参宮者数が100万人以上を上回ったことが江戸時代には数回あった。明治期以降も

1917（大正6）年頃から第2次大戦まで年間参宮者数は100万人を上回っていた。

図1 伊勢神宮周辺図



（出所）西垣晴次『お伊勢まいり』岩波新書、1983年、p. i。

本稿では、わが国の「観光の原点」²とも言われる伊勢参宮の歴史的推移と、その変動要因について経済的・統計的な考察を行う。まず、2節では、江戸時代まで伊勢神宮に参宮者を誘引する上で重要な役割を果たした御師（伊勢神宮以外の神社では「おし」と呼ばれる人びとが登場した経緯について考察する。3節では、隆盛を極めた江戸時代の参宮の動向について見ていく。4節では明治期以降における参宮の動向を概観する。

2. 古代から中世までの伊勢参宮

(1) 御師の登場とその背景

伊勢神宮の歴史について、とくに過去に遡るほどはっきりとしたことは言いがたい。おそらく伊勢神宮の鎮座は5世紀～6世紀頃だったと思われる。また、伊勢神宮の経済的基盤が整ったのは、大化の改新以後のことであり、神宮に神部(神社に所属し租・庸・調を神社に納めた家)と神田が付与され、そこからの神税によって遷宮や祭事の費用が賄われたことについては、論者の間に意見の食い違いは見られない。

後に伊勢参宮の推進力となる御師が登場した背景には伊勢神宮の経済問題があった。10世紀以降、荘園制が進んで律令制の解体が始まると、神税の徴収が困難になった。神領も例に漏れず、その地域内で荘園化が進んだ。このことに対応して、伊勢神宮では、私領と引換えに神宮内の役職を与えたり、特別税を課したりした。さらに、神宮の下級神官である権禰宜層によって土地が新たに開墾された。もともと御厨・御園と呼ばれるものは、その地域の特産物を神宮に差し出し、そのかわりに神税の免除を受ける特定の神部を指したが、権禰宜層によって新たに開墾された土地も御厨・御園と呼び、神宮の荘園とした。このことによって神宮の経済の実権が権禰宜層によって左右されるようになる。

しかし、こうした自墾系の御厨・御園をもってしても神宮の経済問題を解決できなかった。というのはこれら自墾系の御厨・御園の実際の権益は権禰宜層が握っており、神宮の経済を支えたわけではないからである。そこで11世紀後半以後、伊勢神宮の式年遷宮の費用と労働力を全国的規模で公領と荘園に賦課・徴収する役夫工米制が導入された。この役夫工米の制度のもとで、権

禰宜層が役夫工使として国々に派遣され、国の役人とともに荘園に入り込んで役夫工米を取り立てた。彼らは、荘園に認められた「不輸」(無税の特権)と「不入」(役人の立ち入りを拒める特権)の2つをまったく無視し、当時権勢を極めた摂関家の荘園からも遠慮なく取り立てた。こうして全国に派遣された権禰宜層たちは、広い範囲の人びとに伊勢神宮の存在と威力を知らせるとともに、在地領主たちと個人的な結びつきを持ち、伊勢神宮に対する信仰を植え付けていった。

鎌倉時代になると伊勢神宮に対する武士の信仰が盛んになり、東国を中心に御厨の寄進が多くなった。こうした御厨を寄進系御厨と呼んでいるが、寄進の窓口となったのが権禰宜層であり、彼らは口入料と呼ばれる報酬を得て神宮への寄進を斡旋した。彼らがこのように寄進を仲介できたのは、伊勢神宮に対する私幣(臣下や一般民衆が幣帛することは依然として禁じられていたので、在地領主である武士からの奉幣は、神宮である権禰宜層が仲介してはじめて意味を持ったからである。こうした権禰宜層が御師と呼ばれるようになったのであるが、その名称の由来については、御祈祷師の略称であるという説が有力である。また、いつ頃から御師と呼ばれるようになったかははっきりしない。ただし、御師として活動した権禰宜層の大部分は外宮の関係者であり、そのことが江戸時代末まで外宮の活動の方が内宮よりも活発であったことの大きな要因であった。

(2) 中世の参宮

このように鎌倉時代までに伊勢神宮の存在は広く知れ渡るようになったのであるが、どのような人びとが参宮を行ったのであ

うか。平安時代末までは主な参宮者は貴族とそれに付き添った人々と考えられている。次の鎌倉時代は、参宮者は僧侶を除けばほとんど武士であり、その後、南北朝時代、室町時代に入っても武士が多数を制していたと言われる。

室町時代に入ってから一般民衆（つまり当時の人口の大部分を占めていた農民）の間にも伊勢参宮が広まっていったものの、それは畿内またはその周辺の民衆に限られていた。しかも、畿内の民衆にとってさえ、当時往復で十数日もかかる伊勢参宮の旅費を捻出することは困難であった。この経済的ハードルを乗り越えるために生み出された智慧が伊勢講である。伊勢講は、伊勢信仰をする人びとが少額のお金を持ち寄って積み立てを長期間にわたって行い、その蓄積で旅費を捻出して、伊勢参宮を果たそうとするものである。

しかし、なぜ講を組んでまで人びとは伊勢参宮をしようとしたのであろうか。その最大の要因は伊勢神宮側からの積極的な働きかけにあったと考えられる。室町時代に入ると、幕府権力の弱体化が進むにつれて、伊勢神宮の経済を支えてきた役夫工米の制度は次第に実施が困難となり、御厨などからの年貢も滞った。その結果、外宮の遷宮は1434（永享6）年に行われた後、119年後の1553（天文22）年まで行なうことができなかった。内宮もまた、1462（寛正3）年に遷宮が行われた後、123年後の1585（天正13）年まで遷宮が行われなかった。このような経済的危機に対して、伊勢神宮は参宮者を増加させるために2つの方策に取り組んだ。第1は、国家の守護神である伊勢神宮に国民は必ず詣らなければならないという思想を醸成することである。すでに室町時代中期の1440年代に編まれた辞典

『^{あいのうししょう}壺囊鈔』には、「和国は生を受くるひと、太神宮へ参詣すべき事勿論」という表現が見られるようになっていた。もう1つは、御師たちが信仰を広める対象を農民層にまで広げ、この層の人びとを新たな財源としたことである。信仰によって御師と個人的に結びついた人びとのことを^{だんか}檀家（^{だんな}檀那）と言うが、御師は農民層と師檀関係を結び、村々の伊勢講を回って祈祷を行い、大麻（^{おほら}御祓いの札）、伊勢暦などの^{いんもつ}音物を檀家に配って、初穂料（祈祷料）として米を、神楽料としてお金を手にした。それだけでなく、檀家が伊勢講によって参宮をすると、御師は自らが経営する宿に泊めて様々なサービスを提供した。

室町時代にどれくらいの参宮者があったかについてははっきりしない。そうしたなかで、関所の存在から参宮者の多寡をうかがい知ることができる。室町時代中頃、伊勢街道の桑名と日永の間の距離は僅か4里であったのに^{せきせん}関銭（通行料）の徴収を目的とする関が60以上存在したこと、外宮と内宮の間に設けられた外宮関は1485（文明17）年頃年収3000貫（30万両）にも達した。したがって、参宮者数は不明であるものの、参宮は盛況であったと推測される。

しかし、室町時代の後の戦国時代まで、一般民衆が参宮の旅をすることには大きな困難が伴った。それは関所以外にも、戦争、山賊、海賊と、参宮という旅を阻む障壁が山積していたからである。

3. 近世の伊勢参宮

（1）参宮者の増加とその背景

戦争、山賊、海賊、関所という旅の障壁を取り除いたのは、織田信長と豊臣秀吉だった。しかし、多数の民衆が参宮という旅を行えるようになるためには2つの条件が

整わなければならない。第1の条件は、交通環境の整備である。第2は、民衆の経済状態の向上である。

第1の交通環境の整備とは、①馬、駕籠等の乗り物が利用できること、②街道沿いの宿屋の発達、③貨幣の流通、という条件が整うことである。これら3つの条件は江戸時代に入ってから整備された。まず、①については、主要街道の至る所に伝馬問屋、駕籠かき等の交通業者が出現し、他方、海運も発達することによって、旅人は徒歩だけの旅から解放された。②に関しては宿屋や茶屋が普及しただけでなく、中世の木賃宿が食事付きの旅籠に変貌していった。③に関しては、中世では重量が大きく基準価格の低い銅銭しか利用できなかったが、江戸時代に入ると携帯が容易な金貨、銀貨が多量に鑄造されたため、身軽に旅行することが可能になった。さらに為替の制度も発達した。

第2の民衆の経済状態に関しては、その大部分を占める農民から述べる必要がある。江戸幕府は豊臣秀吉の小農民の自立政策を継承し、これによって隷属農民が解放され、独立の生計を営む小農民が増加した。彼らは自らの生産力を高めるための自助努力をした。また、幕府と各藩も積極的に農業振興策を行った。たとえば、農器具の改良、科学的な害虫駆除法の導入などの農業技術の改良である。また江戸初期には新田の開発が活発に行われた。こうした農業振興策によって農業の生産性と生産力は増大した。その結果、元禄年間(1688～1703年)前後から農民の生活水準が向上し、伊勢参宮を行いうる農民の割合の高まりをみる。他方、農民の生活水準の向上は購買力の増加に直接結びつくので、農民による非自給品の購入が増え、商品流通が発展し、これ

につれて商人ひいては町人の生活水準も上昇したはずである。

江戸初期における年間参宮者数は2～3万人と見積もられているが、上記の2つの条件が揃った元禄年間から享保年間(1716～1736年)の時期に伊勢参宮が最も多かったと言われている。その頃の参宮者数に関して、繰り返し引用されているのが、1718(享保3)年に、伊勢山田奉行が江戸に参府した際に報告した数字である。同奉行は、この年の正月元旦から4月15日までの間に42万7500人の参宮者があったと幕府へ報告した。江戸時代の旅の主役は農民であったため、農閑期にあたる正月から3～4月に参宮者の年間総数の7～8割が集中したと言われる。したがって同年の年間参宮者は50万人を上回った可能性が高い。その後、天保年間(1830～1844年)前後には、参宮者は多い年で40万人、少ない年で20～25万人であったとされる。

(2) 江戸時代の御師

このように参宮者数が数十万人にも及ぶ一方、御師の数も激増した。秀吉の晩年の1594(文禄3)年に外宮の御師は145家であったが、参宮者数がピークを迎えた1724(享保9)年には615家と、実に4倍に増えた。一方、内宮については、正徳年間(1711～1716年)頃の御師の数が141人であったことがわかるだけである。おそらくこの頃の内宮と外宮を合わせた御師の数は700家以上あったと推察される。

江戸時代初頭に徳川家康が伊勢神宮の朱印地を認め、式年遷宮の経費のすべてを幕府が支出することを約束したので、神宮は経済問題に苦慮する必要はなくなった。それにもかかわらず、江戸時代に入ってから御師たちは檀家および伊勢講の新規開拓

を行った。その結果、1人の御師で、膨大な数の檀家を抱えるものも登場した。たとえば、内宮御師宇治氏は天明年間頃（1780年代）信州長野付近だけで1万900軒の檀家をもったと言われる。檀家の新規開拓の結果、1777（安永6）年の外宮の御師のもつ檀家の数は大麻の配布数から438万9549に及んだ。

檀家の数は御師の所得に直結する。というのは、江戸時代においても、御師の使いとしての手代が檀家まわりをして大麻と音物を配布し初穂料を得ており、さらに、檀家たちが参宮して御師の家に泊まればそれも収入になるからである。このため御師の間で道者株（檀那場）の売買がなされただけでなく、御師の身分さえ売買された時代もある。つまり、御師の世界では商人の世界と同様に資本の論理が支配していたと言っているであろう。

御師たちは顧客獲得のための企業努力も欠かさなかった。神崎宣武は、旅行業の起りは19世紀イギリスのトーマス・クックに始まると言われるが、伊勢の御師はその100年以上前から総合旅行業を開始していたと述べている。具体的には、檀家たちを手代が伊勢の玄関口ともいべき宮川の船渡し場まで出迎え、宿に着くとすぐに入浴をすすめ、風呂から上がって着替えを済ませると主人が丁寧な挨拶をする。その後食事となるが、これが鯛にアワビに灘の生一本などの二の膳、三の膳がつくという豪勢なものである。これはまさに最近の流行語である「おもてなし」の原型というべきものである。神崎は、こうした下にも置かない接待の背後には御師のたくましい商魂が隠されていたと指摘する。御師たちは、伊勢に来た客が地元に戻ってからその豪勢さを吹聴してくれれば、次回の集客もうまく

いくという、宣伝効果を狙っていたというのである。

（3）参宮者の実像

伊勢参宮をする人びとはどのような人びとであったのだろうか。また、どのような目的で参宮し、どのような効用があったのだろうか。前述のように室町時代から伊勢講は存在したが、江戸時代には一部の地域を除いてほぼ全国的に伊勢講が普及した。講仲間は米やお金を持ち寄るか、または一定の財産を持ち、その運用益を積み立て、それを参宮の費用に充てて、仲間の中から代表を立てて参拝してきてもらう（代参）方式をとることが一般的であった。講への加入期間が長ければ一生に一度は参宮できる仕組みである。いわば会費制であったため、伊勢講には誰でも参加できたわけではなく、一定以上の経済水準の農民、町人で、しかも家長が講仲間になった。伊勢神宮は女性の参詣も認めていたので、講仲間に女性も加わることは可能であったが、女性は少数派であった。代参にあたり、講仲間本人の代わりに、一種の通過儀礼として、若者を参宮させる風習が各地にあった。

大部分の参宮者にとって、伊勢参宮は信仰のためというよりは、旅（上方見物）それ自体が目的であった。身分制度が厳重で、領主の監視や規制が厳しい中で、息苦しい日常生活を送らざるをえなかった農民層は、一般の旅は制限されていた。しかし、社寺参詣は聖なる信仰行為として領主からも寛容に扱われることが多かった。井原西鶴が『好色五人女』の巻二で「いずれも御参宮の心ざしにあらねば、内宮・二見へも掛けず、外宮ばかりへちよっと参りて……」と皮肉っているように、参宮の旅は伊勢へ参るだけでなく、京都大坂を見物し、関東・

東北の者ならば金比羅参りまですることが多かった。しかし、民衆、とくに農民は、旅をすることによって開放感を味わうとともに、見聞を広めることもできた。また、外宮は農業神としての神格をもつことから、全国各地の農民が奉納した各種の種粃を交配して、稲の改良品種を作り、これを「伊勢みやげ」「伊勢錦」などと命名して参宮者に配布した。これによって稲の多様な品種が全国各地に広がり、農業上の技術交流が行われ、米の生産力を高めることにつながるといふ余録もあった。

(4) 抜参りと御陰参り

生涯に一度の参宮が当然のこのように言われるようになると、誰もが伊勢参宮に強いあこがれをもった。しかし、現実には厳しく、家長以外の家族、つまり家庭内の女性や子供が参宮することは極めて困難であった。まして商家や農家の雇い人が参宮することは事実上不可能に近かった。この矛盾を解決するために自然発生したのが「抜参り」である。

抜参りとは、妻、子供、雇い人など、お金や時間が自由にならない人びとが無断で家出して参宮することを言う。つまり、非常手段に訴えて伊勢参宮を果たそうとすることにほかならない。江戸時代の風潮として、伊勢参宮にかぎって罪悪視されず、例外的に大目に見られた。しかし、抜参りをする人びとの大部分は旅費も用意せずに飛び出し、途中、農作業の手伝いをしながら旅を続ける者も多く、物乞いをする者も多かったと言われる。

このような抜参りが周期的に、しかも全国的に大量発生したものを「御陰参り」と呼んでいる。御陰参りとは、伊勢神宮の御祓いや大麻が空から降ってきたというよう

な噂をきっかけにして、比較的短時日の間に、膨大な数の民衆が群集心理に導かれて伊勢神宮に殺到する現象のことを言う。御陰参りは江戸時代に5回発生した。第1回が1650(慶安3)年、第2回が1705(宝永2)年、第3回が1771(明和8)年、第4回が1830(文政13)年、第5回が1867(慶応3)年である。

1650年の第1回目の御陰参りについては断片的な記録が残るだけで、参宮者の数ははっきりしない。1705年の第2回目の御陰参りについては、本居宣長が『玉勝間』三の巻の「太神宮御蔭参り」の中で、ある記録によると宝永2年4月9日から5月29日までの50日間で総計362万人もの参宮者があった、と記している。このように第1回と第2回の御陰参りの人数については信頼性のある情報が得られない。他方、1771年の第3回の御陰参りに関しては、明和8年4月8日～8月9日の4カ月間の宮川の渡し船の利用者数が207万7450人に及んだことがわかっている。伊勢に参宮するためには3つの主要ルートのどれをとるにしても、宮川を超えなければならなかったが、江戸時代には宮川には橋が架かっておらず、渡し場が3カ所あっただけであった(図1参照)。しかも3カ所のうち、1カ所は地元住民用なので、残りの2カ所の渡し船の利用者数を把握すればこれを御陰参りに参加した人数とみなすことができる。1830年の第4回目の御陰参りは3月1日に始まり8月末頃終了した。このときは宮川の渡しで476万人、大湊などから船で来る者が10万人いたとされる。1867年の第5回目の御陰参りは「ええじゃないか」として知られているもので、幕末の不安な世相を背景にして引き起こされたとみなされている。しかし、このときの参宮者がどれくらいであっ

たのかは不明である。

御陰参りと切り離すことができないのが施行である。わずか数カ月の間に数百万人が参宮する御陰参りでは、家長や主人の許可の得られない、しかも僅かな手持ちしかないか無一文の妻、子女、雇い人が過半数を占めたであろう。そこで御陰参りの際には、沿道の領主、富豪、民衆、社寺等がこぞって参宮者に施行した。ある者はお金を与え、ある者は食事を提供し、ある者は無料で宿泊させ、渡し船も渡し賃をとらなかった。駕籠でさえ無料で人を運ぶものがあった。新城常三は、常套手段では参宮の望みを果たすことのできない人びとの、広範かつ深く広がった不満と要求の解決方法として、御陰参りという爆発的な参宮ブームが間歇的に発生した、と述べている。施行はこうした不満を鎮めるために「持てる者」から「持たざる者」への一種の所得移転であったとみなすことができよう。

4. 明治期以降の伊勢参宮

(1) 第二次世界大戦までの伊勢参宮

明治時代に入ると、民衆と伊勢神宮の関係は大きく変化した。西垣晴次は江戸時代までの両者の関係を「のびやかな民衆と神宮との関係」と表現し、明治期以降を「いかめしい神宮像」と特徴づけている。

明治維新後まもなく、明治政府は神道国教化の政策を推し進めた。神道国教化とは、「日本古来の神道を中心に、国民の信仰と、思想を統一しようとする」ものである。これを象徴するかのよう、明治2年3月に明治天皇が天皇として史上初めて参宮した。さらに、明治政府はいち早く神社制度の改革に着手した。具体的には、明治政府は全国の神社を国の統制下におき、続いて、全国主要神社の社格を定めて、伊勢神宮を最

高位に位置づけた。改革はこれにとどまらず、神官の世襲を廃止し、神官の職制を変更した。さらに、全国の神社は境内を除き、所領地を国有化した。もちろん伊勢神宮も領地を国有化されたが、それと引換えに、経費を国庫から負担することが定められた。『伊勢市史』はこのことを「律令時代の国営体制が回復された」と表現している。

明治政府による改革の中で伊勢神宮に対する影響の最も大きかったのは明治4年の神官の世襲の廃止である。これによって師職（御師の職）がなくなり、檀家への大麻の配布も禁止された。御師は伊勢（宇治山田）の経済を長年にわたって支えており、江戸時代には一時期、伊勢の就業人口の50%以上を商工業者が占めるまでになっていた。師職の廃止は伊勢住民にとって想像以上の混乱をもたらした。御師のうち資力のある者は新しい生業を求めて精米、製糸、製紙をはじめ、商業あるいは参宮客を対象とする旅館業に転業した。こうした状況の下で、一般市民は参宮客を対象とする接客業、すなわち、旅館業と土産物を中心とする家内工業に生活の糧を求めた。

旅館業は江戸時代までは御師たちによってほぼ独占されており、師檀関係を持たない参宮者あるいは行商人のための町屋宿が、奉行所による規制を受けながら細々と営業しているだけであった。師職制度の廃止と同時に町屋宿は旅館として自由に営業ができるようになった。ただし、旅館の大部分の経営者は旧御師であった。

伊勢の人びとは時代の変化に敏感でもあった。鉄道旅行の時代が訪れると、いち早く鉄道開発に取り組んだ。1894（明治26）年に津と宮川の間を結ぶ参宮鉄道が開通し、1908（明治40年）には国有鉄道参宮線となって、参宮を徒歩の旅から鉄道の旅に変え

た。また、1906（明治 38）年からは全国で 3 番目に市内電車が走った。さらに、伊勢参宮に訪れた人びとの一部が登山する朝熊山にも大正 14 年に朝熊山登山鉄道が開業し、ケーブルカーで山頂まで行けるようになった。

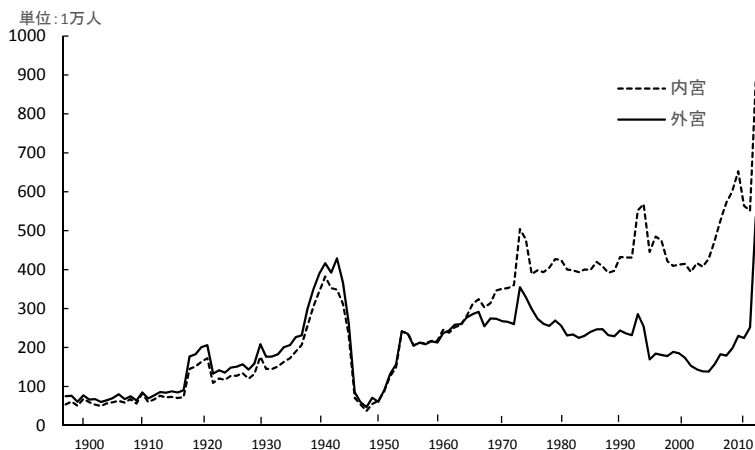
御師の廃止に伴って伊勢講も徐々に解散していった。それでは明治期以降、参宮者数はどのように推移したのであろうか。参宮者数に関しては、「伊勢市観光統計」から 1897（明治 29）年から 2013 年までの、内宮と外宮それぞれの参拝者数の時系列が入手できる。この時系列を折れ線グラフにしたのが図 2 である。このグラフに示された 1897 年から 1945 年までの内宮と外宮の参拝者数の推移から、次の 2 点を指摘できる。第 1 に、1897 年から 1945 年まで参宮者数は増加傾向にあったことである。とくに第 1 次大戦中の 1917 年と、日中戦争が始まっ

た 1937 年に参拝者が急増している。こうした参宮者の増加は、明治以降、公教育の場において、皇室の氏神である伊勢神宮に天皇の赤子である国民が参詣するのは当然であり、義務であると説かれていたことと無縁ではないであろう。第 2 に、この期間、ほぼ一貫して外宮の参拝者数が内宮のそれを上回っていたことである。当時は参宮者の大部分は交通手段として鉄道を利用したはずであり、鉄道の駅から近い外宮が参拝者にとっては訪れやすかったためである。

（2）第二次大戦後の伊勢参宮

第 2 次世界大戦敗戦直前の 1945 年 7 月にアメリカ軍によって行われた空襲によって宇治山田市（現伊勢市）は家屋の 60% が消失した³。敗戦とともに占領軍は国家神道を解体し、伊勢神宮は国家から離れて宗教法人となった。

図 2 明治期以降における参宮者数の推移



（資料）伊勢市観光課「平成 25 年伊勢市観光統計（資料編）」から作成。

（URL）<http://www.city.ise.mie.jp/secure/12124/25shiryohen.pdf>（2014 年 8 月 13 日取得）

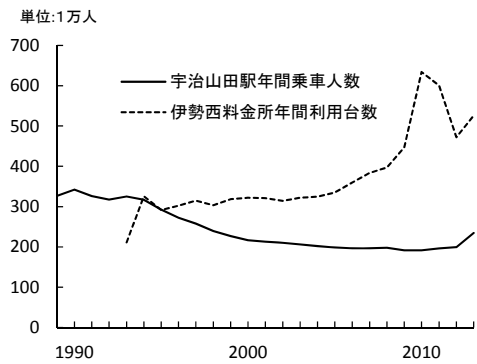
敗戦直後は伊勢神宮の参拝者数も激減した。1947 年の内宮、外宮の参拝者数は戦前のピークであった 1940 年の参宮者数の約

10 分の 1 にまで減少したのである。この事態は「戦時中の伊勢信仰の押しつけ」の反動であったとみなすことができる。しかし、

1953年には内宮、外宮ともに参拝者は200万人を上回った。その後1967～68年頃まで両宮の参拝者は歩調をほぼ同じくして漸増し続けるが、1960年代末から内宮と外宮の参拝客数が乖離しはじめ、乖離の程度は年々大きくなっている。

両宮の参拝者数の乖離の原因としてモータリゼーションの進展を指摘できる。1964年に伊勢市と鳥羽市を結ぶ有料道路伊勢志摩スカイラインが開通し、1975年には伊勢自動車道が開通した。わが国の自家用車世帯普及率は1960年代までは10%台であったが1970年に20%台に上昇すると、1980年には世帯普及率は50%を上回った。そして1991年には世帯普及率は80%を上回り現在まで80%台で推移している。その結果、自家用車利用による伊勢参宮は近年も増加傾向にあり、他方、鉄道利用による伊勢市への来訪者数は漸減傾向にある。図3は時系列データの得られる1989年以降の近鉄宇治山田駅年間乗車人数（定期客含む）と1993年以降の伊勢自動車道伊勢西料金所年間利用台数の推移を示したものである。この図からも、現代の伊勢参宮の旅が列車の旅から自動車の旅に変化していることが確認できる。こうした交通手段の変化は、鉄道駅の最寄りに立地する外宮にとっては参拝客数のマイナスの要因として働き、従来は交通不便であったものの、反面において大規模な駐車場を確保しやすい内宮にとってはプラスの要因として働いているのである。

図3 近鉄線宇治山田駅年間乗車人数（定期利用含む）と伊勢西料金所年間利用台数の推移



(資料) 伊勢市観光課、前掲資料から作成。

しかし、近年の内宮の参拝者数の増加は、単に自家用車利用者の増加によるものだけではなく、地元商業者によって、1993（平成5）年7月に内宮門前町「おはらい町」に「おかげ横丁」がオープンしたことも寄与している。おかげ横丁とは、御陰参りの起こった江戸から明治期の伊勢路の建築物を移築などによって再現した町並みで、三重の老舗の味や名産品、歴史、風習などを体験できる。三重県観光政策課「平成24年観光レクリエーション入込客数推計書」によれば、おかげ横丁の入込客数は1998年以降毎年400万人を上回る盛況である。

また、内宮、外宮の両宮に共通することであるが、式年遷宮の8年前から33の行事を行い、それらの行事のうち御木曳行事、御白石持行事には伊勢市民や全国の崇敬者が行事に参加する。こうしたたくさんの行事、とくに一般市民が参加できる行事を実施し続けていることが、参宮者数の維持と増加に結びついていると言えるであろう。

5. おわりに

本稿では江戸時代までの伊勢参宮の支柱となった御師たちがどのような背景のもとに登場し、また、どのように活動したかを歴史的に振り返り、彼らが数百年も前から「おもてなし」を実践してきたことを見た。また、今日でも伊勢神宮と地元の人びとは参宮者数を維持・拡大するための努力を怠っていない。まさに、伊勢参宮の旅は「観光の原点」であり続けていると言ってよい。

最後に、筆者は、江戸時代に盛んであった富士講の御師たちの家の傍らを通して小学校に通学し、当時は、夏になると御師の家で一泊した富士講の信者たちが白装束に身を固め、杖を手にして、六根清浄と唱えながら富士北麓の吉田口登山道から山頂を目指す姿を目にした経験があることを付言して、本稿を結びたい。

注) -----

- ¹ デイズニリーレポートの数字はロイターのwebサイトの記事(2014年4月1日)、浅草寺の数字は浅草寺のwebサイト、USJの数字はUSJのwebサイト(2014年3月1日のニュースリリース)、成田山の数字は「平成24年千葉県観光入込調査報告書」から入手した。
- ² 2014年1月20日明治大学学部間共通総合講座での船山龍二JTB前会長による指摘。
- ³ 山口千代己「悲惨だった三重県空襲」「歴史の情報蔵」のwebサイト (URL) <http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/rekishi/kenshi/asp/arekore/detail.asp?record=43> (2014年9月10日取得)

【参考文献】

青木和夫編、『日本史大事典』, 1994年, 平凡社
伊勢市役所編, 『伊勢市史』, 1982年, 大和学芸図書
井原西鶴著, 谷脇理史訳注『新版好色五人女—現代語訳付き—』, 2008年, 角川文庫

鎌田道隆, 『お伊勢参り』, 2013年, 中公新書
清水潔監修, 「伊勢神宮: 悠久の歴史と祭り」『別冊太陽』, 2013年, 平凡社
新城常三, 『社寺と交通』, 1960年, 至文堂
新城常三, 『庶民と旅の歴史』, 1971年, NHKブックス
旅の文化研究所編, 『絵図に見る伊勢参り』, 2002年, 河出書房新社
西垣晴次, 『お伊勢まいり』, 1983年, 岩波新書
宮本常一, 『伊勢参宮(増補改訂版)』, 2013年, 八坂書房
吉川幸次郎他校注, 『日本思想史大系 40 本居宣長』, 1978年, 岩波書店

著者プロフィール

新田 功 (にった いさお)

1982年3月明治大学大学院政治経済学研究科博士後期課程退学。同年4月明治大学政治経済学部専任助手、以後、専任講師、助教授を経て、1995年より教授。専門は統計学、経済統計学。研究テーマは、経済時系列分析、QOLの数量分析、留学生調査。

主な著訳書に、『日本人と持続可能な社会』(編著)、『クオリティ・オブ・ライフ』(翻訳)、『社会・人口・介護からみた世界と日本』(分担執筆)、『持続可能な発展の経済学』(共訳)、『環境倫理学』(共訳)などがある。

